

2008、9、20

世界が尊敬した日本人(33)

「世界の良心」とたたえられた国際司法裁判所所長・安達峰一郎

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

世界の平和の殿堂・国際司法裁判所はオランダのハーグにある。



死傷者3千万人以上を出した第1次世界大戦の悲劇から国際連盟や不戦条約(パリ条約)ができ、国家間の紛争を国際法によって裁くこの常設国際法廷が設けられた。

2006年6月12日、この平和宮の「法衣の間」で1人の日本人肖像画の除幕式が行われた。

100年余の同裁判所の歴史の中で唯一の日本人所長である安達峰一郎の肖像画である。

安達峰一郎は一八六九年(明治二年)、山形県東村山郡山辺町で小学校長の長男として生まれた。少年時代に山形県令に三島通庸がなり、中央直結の土木事業を強引に進めて逮捕者が相次いだ。その反動もあり、激しい自由民権運動が起こったが、こうした体験から安達は法律、なかでも国際法を学ぶ志を立てた。

東京帝国大学法科では国際法を学び、明治25年に卒業後は外交官となり、イタリア、フランス、メキシコ、ベルギーにわたって世界を舞台に活躍した。安達はフランス語、イタリア語、英語に堪能で、外務省きっての語学の達人であった。

東大卒業後、一時、和仏法律学校(現、法政大)で「日本の近代法の父」のボアソナード(パリ大学教授)の講義を横にいて、彼のフランス語の話をただちに日本語に訳して学生に伝えたというエピソードが残っている。外交官となった安達は外交交渉には不可欠な人材として成長していった。

明治三十八年の日露戦争・ポーツマス講和会議には小村寿太郎日本全権の随員として出席。ロシアのウイッテ全権がロシア語ではなく、フランス語でまくしたてるのを、安達が日本語に直して、小村全権に伝え、今度は英語で主張するというバイリンガル以上の戦いとなった。

外交交渉では国際法の知識と、専門用語を正確に翻訳できる通訳が勝負の決め手になる。同会議は小村全権とその懐刀となった安達、金子堅太郎や外務省、政治家、軍人のトップの一丸となった勝利だが、安達の奮闘も決して小さいものではなかった。



これ以降、安達の語学力は国際交渉にはなくてはならない存在となり、明治40年、ハーグでの平和会議委員会の日本代表となった。大正8(1919)年のベルサイユ講和会議によって国際連盟が結成され、国際司法裁判所が設立するきっかけとなった。

<写真はポーツマス会議・安達は左手前より4人目>

国際連盟では日本は常任理事国として活躍、同事務次長には新渡戸稲造がなり、安達は裁判所規程起草の委員となり、10年には連盟での国際紛争調停手続研究会委員会の議長を務めるなど国際法では第一人者となった。安達の能力が高く評価されたのは次の事件であった。

大正13(1924)年の国際連盟総会では国際紛争平和処理の「ジュネーブ議定書」が審議されたが、英仏が日本、アジアの立場を無視した内容提出したのに対して、安達は「国際社会の良心にのっとり世界は平等でなければならない」と、敢然と主張して一歩も譲らず、両国の譲歩を勝ち取った。

安達の見事なフランス語の演説を聞いた新渡戸は「安達の舌は国宝だ」と絶賛した、という。また、昭和4(1929)年のハーグでのドイツへの賠償会議の席上、イギリス、フランスが対立して会議が空転した際に、安達が仲介役となり両国の代表を茶席に招いて説得して、仲直りさせたというエピソードが残っている。

安達の存在は際立っており、昭和5年9月の同判事の選挙では53カ国中の49カ国から

支持されて当選、翌6年1月には同裁判所所長に選任された。

安達は62歳。国連常任理事国という日本の国力と、安達のコミュニケーション能力と国際法への抜群の知識、その篤実の人柄とあいまって、司法裁判所のトップに上りつめ、「世界の良心」とたたえられた。

しかし、ここから安達の運命は暗転する。わずか半年後に、満州事変が勃発、国際連盟は日本非難の嵐となった。昭和8年2月には満州国の承認をめぐって日本は国連からついに脱退。板ばさみとなった安達は昭和9年夏に病にたおれて12月28日に亡くなった。

この晩年について書き残されたものは少なく、その心中を察することはできないが、唯一、講演録の中で「日本は戦争を国の必要なる仕事として侵略的な考えをもって国策を樹てるものではない。それは全く不利になり、不正なる。

日本国にとって国際連盟は最も必要であり、最も有利なる機関である」(伝記「世界の良心・安達峰一郎博士」に収録)と述べている。

日本の暴走と国連の対立、板挟みとなり本人の思想行動の矛盾に懊悩した結果が病気となり、急死したのではないか。オランダは安達の死を悼んで国葬の礼をもって安達の永年の国際平和への功績を最大限に讃えた。

「日本が生んだ最高の国際知識人の1人で、外国から国葬をもっておくれた日本人は例がありません」と同財団・佐藤常務は語る。